



福島原発で爆発音

第一1号機 炉心溶融か

経済産業省の原子力安全・保安院は12日、東日本大震災で被害を受けた東京電力福島第一原子力発電所1号機（福島県大熊町）で、午後3時30分ごろに大きな爆発音を伴う爆発が起きたことを明らかにした。その直前には、原子炉内の燃料の溶融が進んでいる可能性が高いと発表しており、原子炉の状態と爆発との関係を含め、東電などが原因を調査中だ。

放射線医学総合研究所や東電が原発敷地内で、燃料中に含まれる核分裂生成物であるセシウムやヨウ素を確認した。いずれも、ウランが核分裂をした後にできる物質だ。

炉心溶融は、想定されている原発事故の中で最悪の事態だ。これが進むと、爆発的な反応を引き起こして広く外部に放射能をまき散らす恐れもある。

爆発音について、枝野官房長官は12日夕の会見で「原子炉そのものであるということは確認されていないが、なんらかの爆発的事象があったと報告された」と述べた。福島県によると、爆発で1号機の原子炉建屋の天井が崩落したことを確認したという。東電社員ら4人が負傷し、病院に搬送されたという。

東京電力は12日午後、同3時30分ごろ現場敷地境界で1時間あたり1015㊦シーベルトの放射線を確認し、その2分後にはほぼ半減したと発表した。1015㊦シーベルトは、一般人の年間被曝(ひばく)線量の限度(1㊦シーベルト=1000㊦シーベルト)を、1時間で浴びる放射線量に該当する。日常生活で自然から浴びている放射線は平均で1時間あたり0.05㊦シーベルト。放射線業務従事者は年間50㊦シーベルトかつ5年間で100㊦シーベル



福島第一原子力発電所12日午前9時47分、福島県、本社ヘリから、山本裕之撮影

トが被曝限度とされている。

政府から待避指示が出た原発から10㊦圏内には約800人の住民が残っていたが、午後6時現在も避難中という。

一方、保安院によると、爆発音のあった後に、1号機の原子炉格納容器の圧力が急激に下がってきたという。格納容器の破損を防ぐため、弁を開けて内部の空気を抜く作業が効果を上げたのか、他の要因かは不明だ。空気とともに容器内の放射性物質も外部に放出されたとみられ、放射線の観測値は上昇している。

原子炉圧力容器内の水位は下がり続けており、午後5時28分の段階で、燃料棒(長さ4㊦)の上端から1.7㊦低い位置にある。燃料棒の半分近くが露出した状態になっている。消防車などを使って冷却水を注入しているが追いついていない。このため、東電は海水も使うことを選択肢の一つとして検討していることを明らかにした。

政府は福島第二原発(同県楢葉町、富岡町)について、避難を指示する範囲を、半径3㊦圏から10㊦圏に拡大した。その後、官邸は第一原発から待避を指示する範囲を、半径10㊦から20㊦に拡大した。